

木曾谷におけるアクセントの変化

著者	加藤 秀貴
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 7: 16-24(1995)
発行年月日	1995-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022398

木曾谷におけるアクセントの変化

加藤 秀貴

1 はじめに

長野県の木曾地方は山の中にある。その谷に沿って、昔は中山道が東西を結んでいたし、今ではJR中央西線や国道19号線が中信地方と名古屋・岐阜地方とを結んでいる。木曾谷は山の中にあっても、古くからの交通路であった。現在、木曾谷の中心地は木曾福島町である。しかし少し大きな用事となると、木曾谷は二つに分かれる。人は、木曾福島町より北の地域では北上して松本方面へ、南では南西の岐阜県中津川市方面へ向かうのである。こういう人の流れを反映して、木曾谷北部の方言には松本方面と共通する表現が多いが、南部では岐阜県側と共通する西部方言的表現も少なくない。このように木曾地方は東西両方言の境界地域でもあり、木曾谷内部にも言葉の地域差がある。本稿では、地域差と年齢差という観点から見て、木曾谷において現在進行している語アクセントの変化を述べる。

1994年5月から12月にかけて、木曾谷の旧中山道沿いの集落で以下のような方言調査を行った。

調査地域：北は榎川村から南は山口村まで、国土地理院発行二十万分の一地形図に出ている集落。

被調査者：各集落、15歳、30歳、45歳、60歳、75歳（それぞれ、昭和59、39、24、9、大正8年生）の5名。男女不問。

地点によっては1、2歳のずれがある。

調査項目：語形、文法、アクセントを含む49項目。

調査者：丹羽一彌・沢木幹栄（信州大学教官）と信州大学人文学部国語学・言語学専攻学生有志。

本稿ではアクセントに関するものを取り上げる。これには語アクセントを聞くための項目と、語形を尋ねた回答の語アクセントを利用したものがある。調査結果は録音されているので、筆者が利用すべき項目を聞き直して本稿のための資料とした。

2 2モーラの名詞

名詞アクセントの調査は、用意した文字を読み上げてもらった。木曾谷では2モーラ名詞に3種類のアクセントの型があり、その体系は共通語と同じである。ただし、個々の語を見れば共通語と異なるものもある。今回の調査では「鼻」（第1類）、「北」「人」（第2類）、「花」（第3類）を質問した。このうち、「花」は全地点で全部の人が○●▽、「鼻」はほとんどの地点で○●▼であった。ともに共通語と同じ型であり、現在のところ変化もなく、安定しているので、これ以上触れない。問題は第2類に属する「北」と「人」である。

今回の調査では「北」は表1のようである。なお表は本稿末にある。新旧両方を回答した話者が少数あるが、以下の表では旧形の方だけを出す。表をすっきりさせるためと、成人後獲得したかもしれない新しいアクセントを除いて、変化の大勢の決した時期をはっきりさせたいからである。

「北」の共通語アクセントは○●▼または○●▽である。『長野県史 方言編』によれば、松本平一帯で「北、人、梨」の3語が平板型○●▼であり、木曾谷を下るにつれて尾高型○●▽の語が増え、岐阜県中津川市に至れば全語が尾高型になるということである。「北へ」は、同書の言語地図によれば、木曾谷南部の高年層に○●▽が分布している。

表1によれば、上松町以南の75歳世代において○●▽が見られる。これは『長野県史 方言編』の図とほぼ同じである。しかし北部の75歳世代と他の世代ではほとんど○●▼となっている。岐阜県美濃地方ではこの語のアクセントが○●▽であるから、かつて○●▽の領域は、岐阜県から上松町付近にまで及んでおり、松本平から木曾谷北部にかけての○●▼と対峙していたと考えられる。それが、60歳世代のころから木曾谷南部にも○●▼が広がり、○●▽は使われなくなったのである。高年層を調査すれば、そのアクセントは『長野県史 方言編』の図と同じような分布になるだろうが、もはやこの地方の「北」○●▽は風前の灯というところである。

次に「人」は共通語で○●▼である。木曾谷では、表2のように、大部分で○●▼であったが、南木曾町と山口村では岐阜県美濃地方と同様に○●▽が見られた。○●▽の領域は表1の「北」より狭いが、表1より若い世代にまで使われている。同じような変化でも、語によって変化の時期は異なることが分かる。若年層では全域で共通語と同じ○●▼となっているので、表2

に見られる○●▽がこれ以上広がってゆくとは考えられない。若年層では共通語化が完了しているのである。

3 3モーラの名詞

ここでは「うろこ」「きのこ」「におい」のアクセントを見る。

「うろこ」の共通語アクセントは○●●であるが、岐阜県では○●○である。この地方の様子は表3のようである。60・75歳世代では○●○が多く見られるが、45歳世代以下では○●●となっている。この地方では全域でほとんど同時期に○●○から共通語と同じ○●●への交替が起こったと考えてよい。

表4は「きのこ」である。『長野県史 方言編』等で指摘されているように、長野県上伊那北部・東筑摩・南安曇・北安曇・木曾の各地方では、3モーラ名詞のうち、共通語で●○○で発音される語の多くが○●○となっている。表4でも分かるように、45歳世代以上ではほとんどが○●○である。この世代は伝統的な方言の使用者と考えられる。しかし30歳世代では共通語と同じ●○○が多くなり、それ以下の若年層では、一部の地域を除いて共通語化している。

表3「うろこ」では45歳世代から共通語化しているのに対し、「きのこ」では30歳世代からであり、共通語化が遅れている。その理由をはっきりしない。馬瀬 1981 によれば、頭高型と非頭高型の対立が起こった場合、他の型との対立、例えば平板型／尾高型とが対立した場合と比べ、耳にとまりやすい頭高型への移行が最も早いと述べられているが、この地方の「きのこ」に関してはそうとも言えない。この「きのこ」は今回とりあげた項目の中で、共通語化が最も遅い例である。

次は「におい」である。表5のように、中高年層ではこの地方の伝統的アクセント○●●が使われているが、若年層では共通語と同じ○●○である。この交替は木曾谷北部の45歳世代で起こっているから、共通語化は北部の方がやや早かったようにも見られる。

以上、それぞれアクセントの型の異なる3語を見てきたが、いずれの場合も、地域差は小さい。したがって共通語アクセントは、松本方面から徐々に地を這うように広がってきたのではなく、マスメディアや教育等によってこの地方全体に一気に広がったと思われる。

その代わりに、年齢差の方ははっきりしている。ほぼ全域で、若年層は高年層と異なるアクセントを使用し、共通語化が完了している。ただし、この3例だけを見ても、共通語化の時期はそれぞれの語で異なっている。この時期の違いが個々の語によるものか、アクセントの型によるものかは、今のところ不明である。例えば「におい」と同じ型のアクセントで発音される他の語の共通語化が、表5のように45歳世代で起こっているかどうかは、今回の小さな調査では分からない。3モーラ名詞のアクセントの共通語化の時期を決める要因がアクセントの型の相違によるか否かを明らかにするためには、さらに大量の調査資料を必要とする。

4 動詞の否定表現「見ない」

「見ない」は、読み上げのアクセント調査のためではなく、否定にナイとンのどちらを使うかなど、別の質問の回答を利用したものである。他の項目とは若干条件が異なるが、参考のために見ておこう。回答のうち、ミンやミランは語形やモーラ数が異なるので除いた。他の質問まで含めてミナイ、ミネーを回答した人のアクセントは表6のようである。ミネーの回答は檜川村に6人、北部の他の町村に3人、合計9人であった。残りはミナイである。なお、「テレビに出て話すとしたらどういうか」という質問に対しては、ミン、ミラン、ミネーは少なくなり、ほとんどがミナイであるが、アクセントの分布は表6と似ているので表は省略する。

ここでも中高年層では○●○であり、若年層は●○○となっている。伝統的な方言で「見ない」は山梨県・静岡県でも○●○であるから、木曾地方でも広く中高型が使われていたと思われる。「見ない」の共通語アクセントは●○○である。「きのこ」のところで述べたように、3モーラの名詞では共通語●○○／木曾○●○の対応が見られるが、動詞の否定表現「見ない」にもこの対応が適用できそうである。表4と表6を比べると、変化の起こっている世代が両者とも30歳世代であり、共通語化の時期がほぼ同じであったことが分かる。ただしこれで、変化の原因は語か型かという、先の疑問が解決したわけではない。

5 3モーラの形容詞

共通語では3モーラ形容詞のアクセントの型には2種類ある。一方、岐阜

県美濃地方や愛知県西部では1種類の地域が多い。今回の調査でとりあげた語とその類別は次の通りである。

第1類 ○●● 厚い・暗い

第2類 ○●○ 暑い・白い・古い

このうち第2類の3語は、今回の調査ではほぼ全域で○●○であり、共通語とも岐阜愛知とも共通している。以下では第1類の2語について述べることにする。

「厚い」のアクセントは表7のように、全体としては○●●と○●○が混じっている。しかし中高年層だけを見ると、北部で○●●が多く、南部では両者が混在している。特に上松町・大桑村で顕著である。したがって45～60歳世代ぐらいまでは、木曾の北部では第1類と第2類の区別がある程度あったが、南部では区別のはっきりしない地点も多かったことになる。若年層では全域で両者が混在しているので、北部でも区別が曖昧になってきていることが分かる。今の若年層の分布を見れば、全域で区別がなくなる日も近いと思われる。

表8の「暗い」も似た傾向であるが、「厚い」より地域差のはっきりした分布を呈している。中高年層では上松町と大桑村に○●○が集中しているから、言語地理学的に考えれば、この地域から変化が広がったように見える。これがこの地域に独自に起こったのか、岐阜県の影響がここに飛び火したのか、この例だけでは断定できない。しかし前述のように、名詞のアクセント変化が全て共通語化の方向に向いていて、メディア等の影響によると思われるのに、形容詞の場合だけが特定地域の影響を受けて、共通語と反対の方向を目指すとも考えられない。

東京では中年・若年層で3モーラ形容詞のアクセントの区別がなくなる傾向が現れてきているということである。これが日本語の傾向であるとするれば、表7、表8の若年層での混在状況を見ると、いよいよ木曾地方にもこの傾向が現れてきたということであろう。

6 まとめ

名詞と動詞の否定表現の語アクセントに関しては、木曾地方で目立つ地域差はない。一方、年齢差の方ははっきりしている。その年齢差から見られる現在の変化は、伝統的なアクセントから共通語と同じアクセントへの交替で

あるから、共通語化といえる。そしてその変化は全域でほとんど同時に起こっているのだから、松本など特定の地方から広がってきたというより、メディア等の影響によるものであろう。また語によって変化の時期が異なるが、その理由は今回の調査では分からない。

形容詞に関しては、やや地域差があるので、変化が一部の地域から起こったのかもしれない。その変化の方向は共通語の体系から岐阜県側と共通するものへの交替である。しかしこれは、岐阜県側からの影響によるものではなく、全国的な傾向に従った変化であると考えられる。

<参考文献>

- 奥村三雄（1976）『岐阜県方言の研究』
- 加藤和夫（1987）「京都・兵庫北部地域における方言の動態－京都北部グロットグラム調査から－」（『関西方言の動態に関する社会言語学的研究 研究成果報告書』）
- 真田信治（1993）「大阪－岡山間グロットグラム調査報告」（『大阪大学日本学報』12）
- 長野県史刊行会編（1992）『長野県史 方言編』
- 平山輝男（1960）『全国アクセント辞典』
- 馬瀬良雄（1981）「言語形成に及ぼすテレビおよび大都市の言語の影響」（『国語学』125）
- NHK編（1985）『日本語発音アクセント辞典』

（かとう ひでき ・ 岐阜県職員 1995年信州大学卒業）

	表 1	表 2	表 3
	北へ	人が	うろこ
町村・集落 / 年齢	1530456075	1530456075	1530456075
榑川村	賛川	+++++	+++◇◇
	平沢	+++++	+++++
	奈良井	+++++	+++++
木祖村	藪原	+++++	+++◇◇
	向吉田	+ + + +	+ + + ◇
日義村	德音寺	+++++	+ + + ◇
	宮の越	+++++	+++ +
	上村	+++++	++++◇
	原野	+++++	+++ ◇
木曾福島町	上田	+++++	+++◇◇
	杭の原	++++	++++
	旭町	+++++	+++ +
	本町	++++	++++
	川西	+ + + +	+ + + +
	神戸敷野	+ + + +	+ + + +
上松町	上条	+ + + +	+ + + ◇ +
	瀬木	+++ +	+++ ◇
	町部	+++ + ◇	+++ + ◇
	寝覚	+++ + ◇	+++ + ◇
	小野	+++ + ◇	+++ + ◇
	荻原	+++++	+++++
	立町	+++++	+++ ◇
	倉本	+++ +	+++ ◇
大桑村	上郷	+++++	+++◇◇
	和村	+++++	+++◇
	須原	+++++	+++ + ◇
	東矢	+++ + ◇	+ + + +
	弓殿	+++++	+ + ◇◇
	野尻	+++ + ◇	+++ + ◇
	野尻	+ ◇ + +	+++ +
	野尻	+++ + ◇	+++ ◇◇
	下在	+++ + +	+++ + +
	十兼	+++ + +	+++ +
南木曾町	柿三	+ + + +	+ + ◇
	其留野	+++ + ◇	+++ ◇◇
	白戸	+++ + +	+++ + ◇
	天神	+ + + ◇	+ + + +
	妻籠大妻籠	+++ + ◇	+++ +
山口村	峠	+++++	+++ + +
	馬籠	+++ + +	+++ + +
	荒町	+++ + ◇	+++ +
	キタエ	ヒトガ	ウロコ
	◇ ○ ● ▽	◇ ○ ● ▽	◇ ○ ● ○
	+ ○ ● ▼	+ ○ ● ▼	+ ○ ● ●

		表 4	表 5	表 6
		きのこ	におい	見ない
町村・集落	年齢	1530456075	1530456075	1530456075
榑川村	費川	++◇◇◇	+++◇◇	+◇◇◇◇
	平沢	◇◇◇◇◇	+◇◇+	+◇◇◇◇
	奈良井	++◇◇◇	++◇+◇	++◇◇◇
木祖村	藪原	++◇◇◇	++++◇	+◇◇◇
	向吉田	+◇◇◇◇	+ +◇◇◇	◇◇◇◇
日義村	德音寺	+◇◇◇◇	+◇◇◇◇	+◇◇◇◇
	宮の越	+◇◇◇◇	+◇◇◇	++◇◇◇
	上村	++◇◇◇	+++◇◇◇	◇+◇◇◇
	原野	+◇◇◇◇	++◇◇◇	+++◇◇
木曾福島町	上田	+◇◇◇◇	++◇◇	++◇◇
	杭の原	◇+◇◇◇	++◇◇+	+◇◇◇◇
	旭町	++◇+◇	++++	+◇◇◇◇
	本川	++◇◇◇	+++◇◇◇	++◇◇◇
	神戸	+ +◇◇◇	+◇◇◇	+◇◇◇◇
	敷野	+◇+◇◇	+◇+◇◇	+◇◇◇◇
上松町	上条	+◇◇◇◇	+◇◇◇◇	+ +◇◇◇
	瀬木	+◇◇◇◇	+◇◇◇◇	+◇◇◇◇
	町部	++◇◇◇	+◇◇◇	+◇◇◇◇
	寝覚	++◇+◇	+◇+◇	++◇◇◇
	小野	++◇++	++◇◇	◇◇◇◇◇
	荻原	+◇◇◇◇	++◇◇◇	++ +◇◇
	立町	++ +◇◇	+◇+◇	+++◇◇
	倉本	++◇◇◇	+◇◇◇	◇◇◇◇◇
大桑村	上郷	+◇◇◇◇	◇◇◇+◇	+◇◇◇◇
	和村	++◇◇◇	◇◇◇◇	+◇◇◇◇
	須原	++◇◇◇	++◇◇◇	◇◇◇◇◇
	東矢	+◇◇◇+	+◇◇◇◇	◇◇◇◇◇
	弓殿	+◇◇◇◇	+◇◇◇◇	++◇◇◇
	野尻	++ +◇◇	+◇◇◇	++◇◇◇
	野尻	++◇◇◇	+◇◇◇◇	++◇◇◇
	下郷	++◇◇◇	+◇◇◇◇	+◇◇◇◇
南木曾町	柿留野	+◇◇◇◇	+◇◇◇+	+◇◇◇◇
	三天	+◇+◇◇	+◇◇+◇	+◇◇◇◇
	神戸	◇◇◇+◇	+◇◇◇◇	++◇◇◇
	妻籠	++◇◇◇	++◇◇◇	++◇◇◇
	大妻籠	+◇◇◇◇	+++◇◇◇	+◇◇◇◇
山口村	峠	◇+◇◇◇	+◇◇◇	+◇◇◇◇
	馬籠	◇++◇◇	+◇+◇◇	++◇◇◇
	荒町	+◇+◇◇	◇◇◇+◇	+◇◇◇◇
		キノコ	ニオイ	ミナイ
		◇ ○ ● ○	◇ ○ ● ●	◇ ○ ● ○
		+ ● ○ ○	+ ○ ● ○	+ ● ○ ○

		表 7	表 8
		厚い	暗い
町村・集落 / 年齢		1530456075	1530456075
楢川村	贄川	+++++	+++++
	平沢	+++++	+++++
	奈良井	+++◇+	+++◇+
木祖村	藪原	+++◇+	+++◇+
	向吉田	◇++++	+ + + +
日義村	德音寺	◇ + + +	◇ + + +
	宮の越	◇ + + +	◇ + + +
	上村	+ ◇ + + +	◇ ◇ + + +
	原野	◇ ◇ + + +	+ ◇ + + +
木曾福島町	上田	◇ + + + +	+ + + + +
	杭の原	+ + + +	◇ + + +
	旭町	+ + ◇ + +	+ + ◇ + +
	本町	◇ + + +	+ + + +
	川西戸	+ + + +	+ + + +
	神戸敷野	◇ + + +	+ + + +
上松町	上条	◇ + + +	+ + + +
	瀬木部	+ ◇ + +	◇ ◇ + +
	町寝覚	◇ + ◇ +	◇ ◇ ◇ + ◇
	小野	+ ◇ ◇ + +	◇ ◇ ◇ + +
	荻原	+ + + + +	+ + + + ◇
	立本	◇ + + ◇ +	+ + + ◇ ◇
	倉本	+ + + ◇ ◇	◇ ◇ ◇ ◇ ◇
	兼	+ ◇ ◇ +	◇ ◇ ◇ +
大桑村	上郷	◇ ◇ + +	◇ ◇ + +
	和村	◇ + + ◇ ◇	◇ ◇ + ◇ ◇
	須原	◇ + ◇ + ◇	◇ ◇ + ◇ +
	東	+ + + + +	+ ◇ ◇ ◇ ◇
	弓矢	+ + + ◇ ◇	+ + + + ◇
	殿	◇ ◇ ◇ + +	◇ ◇ ◇ + +
	野尻	◇ + + +	◇ + +
	野尻	+ ◇ ◇ + +	+ ◇ ◇ + +
	下	+ + ◇ + +	+ ◇ ◇ + +
	兼	◇ + + + +	+ ◇ + + +
南木曾町	柿其野	◇ + + +	+ + + +
	三天	+ ◇ + + ◇	+ ◇ + + +
	神白	◇ + + + +	+ ◇ + + +
	妻籠	+ + + + ◇	◇ ◇ + + +
	大妻籠	+ + + ◇ +	+ + + ◇ +
山口村	峠	◇ + + ◇ ◇	◇ ◇ ◇ + +
	馬籠	◇ + + + +	+ + + + +
	荒	+ + + + +	+ + + + +
		アツイ	クライ
		◇ ○ ● ○	◇ ○ ● ○
		+ ○ ● ●	+ ○ ● ●